

随 想

式年遷宮

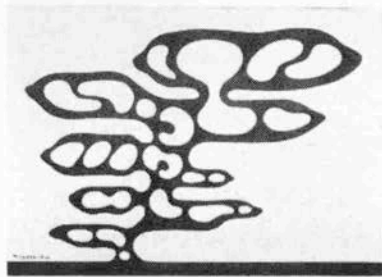
福田 義文

△生田神社宮司▽



伊勢の神宮は、第六十一回式年遷宮（十年毎）を十年後に迎えることとなり、天皇陛下より二條大宮司に御造宮の御言葉があった由、漏れ承った。神宮の式年遷宮は、あらゆる建物と御神宝等が新築・奉製されるのであるが、全国の神社の大方は、塗替・改築が主で春日大社（凡二十年毎）、宇佐八幡宮（平均三十年毎）等などは、それぞれ式年制度により造替が行われている。

当生田神社に於ては、江戸時代



カット／吉田稔郎

より二十年から三十年余りで、御本殿御屋根替・改築工事が執行されて来たが、昭和三十五年戦災復興されてより自後二十五年毎の式年制度が確立した。この制度により、昭和五十八年式年造替奉賛会が設立され、会長に外島健吉氏、副会長に中内功氏が就任され活動に入った。本年初頭より募金活動と御本殿以下各社殿等の塗替・大改修が施工され、募金も目標を超え、漆塗・鋳金具・神宝等着々と

進行して八月末には全て完成の予定である。

生田神社は、源平合戦（八百年前）より今次の太平洋戦争など、度重なる災禍はあったが、その都度氏子・崇敬者の手により立派に再建していることは、史料に歴然としている。神社の鎮座する「生田森」は古来有名であった。昭和八年頃、小磯良平画伯の北野のアトリエから、うっそうたる美しい森が見えたと言われ、詩人・足立巻一氏も東門に住み、少年時代を生田森で過ごし、アルカッシャの森」という名詩がある。作家・吉川英治氏が昭和二十九年「新平家物語」の取材で、生田森を訪れ、「森は戦災で焼失した」と報告されたが、報告と違って森は五百年の樹齢を保ち、見事に再生し、野鳥の訪れるまでに緑したたるばかりになった。

その巨楠の緑の中に、金色の鋳金具と丹塗もあざやかに造替が竣工した。九月二日には、造宮なった本殿敷地内に、氏子・崇敬者の御稚児さん達の奉仕により「お白石持ち行事」が執行され、いよいよ九月十九日夜、御神体を仮殿より元の御本殿にお遷しする正遷座祭、続いて二十日には、天皇陛下・三宮家等の幣帛料・神饌料奉獻の奉幣祭が斎行される。当日は、「神宮舞楽・胡蝶の舞」の奉納が



式年造替仮遷座祭

あり、ことに神宮祭主鷹司和子様を始め、二條大宮司・神社本庁の徳川統理外、奉賛会役員参列して厳肅に式年遷宮が行われる。

二十日より三十日まで、奉祝行事として、親世元家元の能楽、實川延若丈の日本舞踊、千宗左家元の献茶祭、華道家元の献華祭、更には観月祭・会館改装記念コンサート(堀内孝雄とケイインズ)など数々の奉祝行事が予定されている。総工費八億二千万円(第一期、第二期)。

また、今回の式年造替を記念して、徳川期に於ける生田神社の崇敬史(後神家文書)「生田神社史・中巻一千頁」が刊行され、「生田神社会館」も大改修し面目を一新、秋の結婚シーズンに迎えることとなっている。

「神戸からこんにちわ」
「天津からこんにちわ」

松田 和子

▲ラジオ関西西報道制作部▼

耳で聞いて一番美しい言葉は、フランス語と中国語であると聞いたことがあります。テープ編集室の一隅で、始めから終りまで中国語で語られているテープを聞きながら、そのことばを実感としてうけとめたのは神戸の町がポトピア一色に染まり、おまつり気分にわきかえっていた1981年の夏



筆者(ラジオ関西のスタジオにて)

でした。

このテープは天津放送局から送られてきたもので、前の年の1980年、ラジオ関西の阪上豊社長らの天津訪問がきっかけになって、天津放送局とラジオ関西の番組提携が決まり、中国語はほとんど分らない私が担当になったのです。日本人にも聞いてもらおうと思えば、中国語の間に日本語をはさ

みこんでいく必要があります。ラジオの番組づくりの細かいことを言ってもお分かり頂けないでしょうが、日本語をはさみこんでいくためにはまず、すでに完成している天津放送局制作の番組を、いったんパラパラにしなければなりません。内容によっては5秒で日本語を入れたり、時には3分近くも中国語を流してから日本語を入れることもあります。担当者として一番恐れたミスは中国語と日本語が一致していないこと、つまりテープの順番が狂っていても気がつかずに全く違う内容の日本語を入

れてしまわないだろうかということでした。

幸い日中旅行社の加藤朋子さんをチーフとするグループが、台本の翻訳からテープの編集、ダビングに至るまでスタジオにつきっきりで全面的に協力して下さったおかげで、無事一回目は放送することが出来ました。

番組担当者としては、初歩的なミスを避けるためにはまずテープのどの部分が中国語の台本のどの部分にあたり、翻訳文のどこにあたるのかを聞き分けなくてはなりません。始めのうちは自動車のヘッドライトを消して暗やみの中を走っているような不安がありました。

しかし番組を作って3カ月もたつと、幾つかの単語、例えば神戸は「シエンフ」、天津は「ティエンジン」、現在は「シエンザイ」などと、きれぎれには聞きわけられるようになりました。トンネルの中でわずかにひとつふたつ信号灯がみえるように、それらの単語が手がかりになって、「ここはどこの部分」とテープと台本の部分が一致してくるのです。

学生時代には一流の先生方の教えをうけながら、何ひとつ身につかなかつたのに、この調子でいくと本格的に中国語をマスターするのも夢ではないかもしれないと、

何冊かの中国語の入門書を買ったものこの時期です。

しかしながら私の進歩は番組作りに必要な最低条件、つまりテープのどの部分が台本のどの部分にあたるかということが分かるというあたりでバツクリととまってしまったのは残念です。

(第8回井植文化賞報道部門を受賞して)

「本を読まねば」

工藤 恭孝

△ジャンク堂書店△



「本屋だといろんな本が読めますね。」

「読書量は相当なものでしょう。」
初対面の人と少し話し始めると決まってこう言われる。その都度、こちらは恥しい思いをさせられる



ぶっく・ふぉーらむ (神戸の詩人連展)

相手は話題に詰ったか、あるいは心底羨しく尋ねるのか知らないがこちらとしては返事に困る。仕事に追われて、などと格好つける気は毛頭ないが、実際、なかなか本を読む時間がない。本屋のあるじが本を読まないでは、あまり褒められたものではない。だから「ええ、まあ」とか「いや、そうでも」などと、つい誤魔化してしまう。人並に「本を読まねば」と思いつつも、暇を見つけるとラケット片手にコートを出たり、グラス片手に人と話すことを優先してしまう。

活字離れた。やれ出版業界の危機だと叫んでみても、当の本屋のあるじからしてこの有様。だからこれはちよっと根が深い。

自分の事を棚にあげるのも何だが、今の学生は本を読まないと言われる。だけどこれは少し的外れ。昔は本を読む人の多くが学生になったものだが、今は猫も杓子も学生で、本を読まない人までも学生になるだけの話。本を読んだる知的好奇心旺盛な学生はどこも健在だ。むしろ昔より総数では増えているはず。

増えるはずの本屋の客が、本を買わなくなった。いろんな理由があるが、本屋の側の問題も大きい。スーパー商法に右倣えと、薄利多売、衝動買いを煽る。新刊指向や、ベストセラー指向の品揃え

では、読書人の欲求を満たせない。本好き人間を対象に商いすることを忘れ、その場限りの浮動票相手に奮闘努力。選挙と同じでこの浮動票、なかなか魅惑的。だけど基礎票あつての選挙戦。本好き人間の欲求をなおざりにするようでは、本屋の将来は暗い。

本屋の将来、明るくするため、まず第一は品揃え。だけどこいつは時間がかかる。兎にも角にも地道にコツコツやるしかない。品揃え以外にも、あれこれ始めている。地元の著者が、自ら著書を語る「ぶっく・ふぉーらむ」企画して下さる社会システムの水谷願介先生。共催して下さる神戸市民文化振興財団。それに著者の先生方。多くの方に助けられて毎回好評だ。

又、さまざまな展覧会も開いている。晶子展から始まって、志賀直哉・直井潔展、久坂葉子展、竹中郁展、山本周五郎展、薄田泣菫展。文学展ばかりではない。女性問題のフェア、浜本陣安田家・豪商北風家古文書解読展、城郭展なども予定している。

多くの方の力を借りながら本屋の将来を明るくするため、本好き人間の本書離れを防ぐため本を読む暇もないほどあれこれ動きまわっている毎日だ。本など読んでいられない。

その後の怒れる若者たち

軒上 泊（作家）

カット／田中一好

約束通りの時刻に、アラン・シリトーは現われた。直前まで、僕はそのホテルの一室で、最近のシリトーの発言が載っている記事を読んでいて、シリトーが部屋へ入ってきたのに、気が付かなかった。出版社の人やカメラマンなどが何人か出入りしていたため、少々、人の足音に対して鈍感になっていたみたいだ。

来られました、と言われて、慌てて顔を上げると、シリトーはすぐそこに立って少し笑みを浮かべていた。ああ、この人がアラン・シリトーなのだと思った。「ウイリアム・ポスターズの死」や、「ノッティンガム物語」などの本で見た、シリトーの写真が頭の中へ出てきた。やがて、それらの写真はずっと後ろへ退がり、眼前の実物の姿の方がはっきりしてきた。僕は急いで立ち上がると、初めまして、ケンジョウですとあいさつした。シリトーも、にこっと笑って自分の名前を名乗った。シリトーの背丈は僕とほとんど同じで、体重も似たような感じに見えた。窓際のボックスへ腰掛けると、僕はすぐに雑談に入った。お互いの本の交換をし合ったのだが、シリトーにもらった「長距離走者の孤独」に比べて、自分の「九月の町」

が、ひどくふわふわと軽いものに思えた。スミスとサードが同じ少年院へ入れば、どうなるだろうと考えた。

僕がシリトーの本を初めて読んだのは、はたちを過ぎた頃だった。その頃、僕は神戸市役所の独身寮に住んでいて、夜は時々神戸大学へ通っていた。その独身寮に一人の文学青年風の男がいたのだ。彼は日曜日の朝、僕の部屋を訪ねてくると、たまには本でも読んだらどうですかと言って笑った。とにかく、はちちを過ぎるまで、僕は一冊の本も読むことがなかったのだ。というのも、我が家には本のような余分なものは何もなかったし、僕の方にも、読みたい欲求や必要性はなかったからだ。つまりは、失恋の傷手も、生まれてきた悩みも知らない、きわめて無頓着な十代を、結構明朗に通過してきただけの過去しか、持ち合わせていなかったのだ。

その同僚が、じゃあこれでも、と最初に貸してくれたのはカミュの「異邦人」だった。頭が少々飢えていたのか、初めての読書体験にしては最後まで一気に読み終えた。なんとなくおもしろかったので、彼に感想を訊かれて、僕はそのように答

えた。すると彼は、そうでしょうと言い、僕の知らない色んな話を聞かせてくれた。世の中には小説家という職業があって、小説を書いて生活している人がいるんですよ。そのところで、僕はたしかな手ごたえを覚えた。当時の僕にはそれすら知らないことだったし、田舎者の眼には、作家というものが、とても都会的でカッコのいい職業に映った。その場ですぐに小説家になろうと決めた。丁度、自分の一生の仕事を探っていた時期だったし、四年後には、また兵庫の片田舎へ帰らないといけないのもわかっていた。それだったら田舎でも出来るだろうと思った。要するに紙とペンがあればいいのではと考えたのだ。

その後も、彼は何冊かの本を貸してくれた。「長距離走者の孤独」は、三冊目か四冊目だったと思う。「異邦人」との間に読んだ本はまったく覚えていないが、それを読み終えた時には、今度は、こういう小説が書ける作家になりたい。そこ

まで進展していた。

「将軍」「グスマン帰れ」「屑屋の娘」「土曜の夜と日曜の朝」……。次々とシリトリーの作品を読み始めた。二冊目からは、もう同僚に貸してもらう必要はなくなっていた。

二時間の間に、シリトリーは色んな話をした。

「トルストイもフローベルも、小説の主人公はたいてい二十五歳以下です。私はもう五十六歳ですから、そういうのを読まされると、心が痛みます。可能なら、私は二十五歳以上年を取りたくないですね。二十五歳というのは、おそらく境目だと思います。青春と、年老いた人々が何を考えているかの、両方を思いやれる年の。その前では自我が先行し、その後では思いやってばかりいます……」

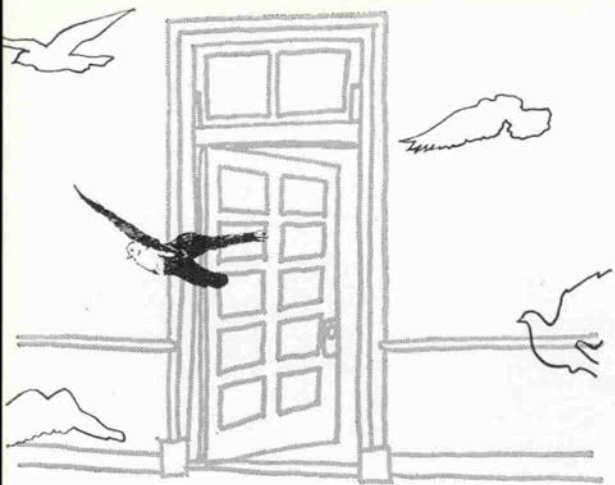
また、シリトリーはこうも言った。

「私は、反抗的な少年ではありませんでした。何故かと言うと、まず早く家や故郷を出たからです。従兄弟がたくさんいて、たいていは、更正施設に入れられた経験を持っています。私の育った環境というのはそういう所だったのです。たまたま私は入りませんが、それは運が良かっただけのことです。勿論入りたくはありません。入ればますます自由がなくなりますから……」

そして最後にこう言った。

「作家というのは、生まれて死ぬまで非常に孤独な作業の連続で、社会から認められるというのは間違いです。常にアウトサイダーでなければなりません」

それらの言葉は、シリトリーが言うとき少しも色あせていなかった。同時に、いかにも、その後の「怒れる若者たち」の発言にふさわしく思えたのだ。



●こうべ味な旅③

ガード下

水野正夫（ファッションデザイナー）
カット／石阪春生



並んでいるが、その中で見落せないもの、そこにはファッションがある。

それも下町の小粋な着こなし、そして庶民の為の着るものが、溢れている。

それもこの頃では古い物というより、その手の着る物屋さんが増えてしまって、蚤の市肝心の、魅力がなくなってしまうと、と嘆く人も多いが、当世のクリニヤンクールは今や着るものファッションが大勢を占めているといってもいいだろう。

売る物だけでなしに、それを売っているお兄さん、お姉さん、いやおじさん、おばさん達の着こなしにも捨て難いものがある。

今、ここにパリの粋が残っている。

そのエスプリを、私は神戸へ行くと、あのガード下に見る。

旅行者は殆んどの場合見掛けなが、神戸慣れた人達が歩いている。

御存知のように、このガード下、細かい店がずらーっと、三宮から元町を出た辺り迄続いていて、ゆっくり見て歩いて、ちょこちょこ買物でもしていたら、半日位はかかるかも知れない。

それもこの細かい店達が、何をどうやって売っているのか判然としないのが面白く、全く蚤の市、中にはきちんとした店も、いわばファッションナブルな店もこの頃では出来てきて、三宮寄りにはどこへ出しても恥しくない店が増えた。

古着屋もある。

パリの場合でも、古着は今や大きなファッションで、おしゃれな連中は専らこの古着を漁る。

着古した時と、今、誰も着ていないのが、うれしいのだろう。

パリに居るとき、日曜日、決まって私はクリニヤンクールへ出掛ける。

つまり、日本でも有名な蚤の市である。

古い骨董からがらくたに至るまで、雑多な物が

何時だったか私もこのガード下で、アメリカ軍の、迷彩色をプリントしたジャケットとズボンを買った。

具合良く洗いざらしてあって、色落ちしていて厚手木綿がぐったりしている加減が何ともいえないかった。

今はそのままにしてあるが、ジャケットの方は相当たっぶりしているので、裏に毛皮でも張ってうんと気障に着てやろうと考えている。

又、これは買う時ちょっと気が引けたが、古い財布が山のように籠に盛られていて、びっくりする程の安い値で売っていた。

パリの蚤の市で入歯まで売っている事を考えたら何でもないのだが。

中から使い込んで尚かつ味のいいのを二つか三つ拾い出したが、何でも新品よりはややつかった物の方が好きな私は、今でもそれは気に入っている。

神戸の他の通りの店でも勿論よく買物はするがこれはどこへ行っても同じように、決められた種類の品を、決められたパターンで売っていることが多い。

蚤の市やガード下にはそのパターンが無い。洋服の陰から食器の商品が覗いていたり、雑貨屋の店先に程度のいい皮のジャケットがひとつぼつんと置いてあったりする。

予想がつかないから、はっとする。

それと店構えがまあ大して気取ってないから気軽に入って、落付く事が出来る。

この頃他で増えた店に、客がちよっと触っても店員がすぐそれを直す所があるが、これは店の方

の思い違いで、これでは客は落付いて品物を選ぶ事も出来ない。

その点このガード下の店達は、一番客が安心して買物を楽しめる。

疲れたらガード下の通りにも、又ちよっと山手の方へ折れば、軽食、喫茶の店にも事欠かない。

軽くコーヒ一杯、うどん一杯で、又もや私はこのガード下巡りをつづける。

聞けばこの神戸という街、戦後の復興はここから始まったという。

日本中が焼野原になった時、最もよく雨風をしのご所としては、このガード下が格好の場所だったのでだろう。

そういえば今思い出したが、戦後の物の何にも無い時代、勿論皮の靴なんぞ思いもしない時、わざわざこの神戸の、ガード下の靴屋で、あの頃流行っていたラバソール、底がゴムの厚いので出来た、如何にもアメリカ渡りという茶の靴を買った。

今迄履いていた固い底の黒い靴はそのまま靴屋へ置いて、新しいラバソールで東京へ帰った。

ラバソールの、宙を飛ぶような感じは、今でもはつきり覚えている。

あの柔かい地面へのクッション・悲しくそれは戦争が終った、という実感だった。そのラバソールで心機一転、私はアメリカへ飛んだ。

考えてみれば、私と神戸、しっかりとこのガード下の店々でつながっているようだ。



▲ 著者紹介 ▼

昭和3年、名古屋生まれ。東京外語大、武蔵野美大を遊学し、文芸学院油絵科卒。昭和30年から3年間、欧米に渡り、帰国後クチュール・水野を経営。日本の代表的なオートクチュールデザイナーとして、現在活躍中。

NEW HEART OF KANSAI THE ALL KANSAI

9月号

好評発売中

¥580 (年間購読 ¥8,500)

月刊

オール関西

感動と共感を
呼ぶ熱い雑誌

特別企画 この秋関西が面白い

ビッグインタビュー

梅棹忠夫

現代の巨匠ソフイ・
ドウレスレール



今昔絵双紙〈5〉田辺聖子

地球を歩く 東洋と西洋の交差点「トルコ」

小説 太陽の発見者〈3〉阿部牧郎

日本の宝との出会い ●高松塚古墳壁画

空から見た造形美「比叡山 延暦寺」

美女登場「小倉直子」/スターハイライト「西川のりお」



評伝・川端康成④ ……石濱恒夫

上方味覚紀行 ……楠本憲吉

大阪の曲がり角 ……木津川計

ニユーメディア情報 / タウンジャーナル
西日本ホットライン / カルチャールカレンダー
今月の健康 / パーティ&シンポジウム
マンガ好き一代男 / オラクル / 古口カササキ
続・沙羅利満氏の経済教室 / 建元正弘
足相術 / ヤングのページ

最新ブライダル事情

活弁鎮魂歌

レクイエム

米花 稔 △神戸大学名誉教授・福山大学教授▽

東京は浅草寺の西参道入口に、「映画弁士の塚」のあるのを御存じであろうか。「名人天才の相次いで現れその人氣は映画スターを凌ぎわが国文化の進展に光彩を添えたが昭和初期トーキーの出現のために姿を消すに至った」とある。東京の活弁百六人の名が刻まれている。鳩山一郎書、大蔵貢



浅草寺・西参道入口にある活弁106人の名が刻まれた「映画弁士の塚」

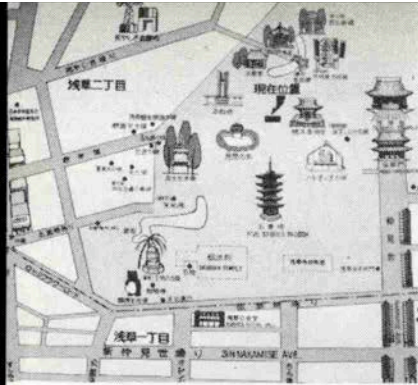
建設、映画六社協賛、活弁全盛期から四半世紀の昭和三年のことであった。関西にも当時活躍した逸材はすくなくないが残念ながらこのことは全くなく忘却の彼方に去っていった。たまたま「映画の発祥地神戸に記念碑を建てる会」の準備の進んでいる折だけに、活弁文化のはかなさを感じる。

東ではその後活弁から独特の話術に及んだ徳川夢声、大辻司郎、後輩を育てた漫談の牧野周一、松井翠声など多様な芸能人を生み幾人かは最近まで活躍した。その再生最盛期に浅草の風土もあって記念塚を残したと思う。

関西でも大正から昭和はじめの一〇余年の活弁全盛期に大阪の洋画で里見義郎（松竹座、弁天座）邦画現代物の泉詩郎、時代物の伍東宏郎（朝日座）などの活躍が、レコードの映画物語でも全国に知られた。神戸も松竹座の堀口美郎、大島弘浪、キネマクラブの島村白鳥、朝日館の薄田群暁などファンに親まれた。神戸新聞社編兵庫県大百科辞典に弁士名も詳しい。東の活弁の語り口がいわば叙事的でそれだけ芸の展開の可能性がひろがったのに対し、関西のそれは叙

情的で歌うようでありととき心にしみるのが受ける割に、語り口の狭さが、その後の展開を不可能にしたように思う。今のテレビの歌謡番組の玉置宏、「水戸黄門」の芥川隆行など東のナレーションにふと関西の当時の活弁調を思いおこすNHK朝のドラマ「ロマンス」では活弁が映画づくりをゆがめる場面が強調されたがあれは初期のこと、あれだけでは誤解を残す。サイレント映画盛盛期は活弁文化こそ日本の和洋映画に独特の魅力をもたらした。一館六人の弁士ほぼ同数の楽士、番組には担当弁士名伴奏選曲者名が付され、同じ映画でも、台本はあるものの各地各館相当個性的に楽しんだ。さればこそ旧制高校まで姫路で育った筆者もわざわざ神戸大阪に観にでかけた。その姫路駅前にあった南座で当時現代物で詩林映二という弁士は今も耳に残っているひとりである。これが実は詩人の生活の糧で、戦後は古本屋などして神戸半どんの会的小林武雄さんらに協力して活動した文化人であったと知ったのはずっと後のことである。

昭和七年であったか姫路のわが家の裏の旅館二階で弁士楽士がストライキで氣勢をあげたのも既に半世紀前のことである。活動写真という新技術で生まれ、そしてトーキーという技術革新で消え去った全国数千人以上の活弁のつくりあげた文化の実に短い生涯をなつかしくいとおしむのである。



浅草盛熟期の案内図

経済ポケット ジャーナル

★兵庫県副知事に

三木真一氏が就任

任期半ばに辞任した小笠原副知事の後を受けて、三木真一出納長が推された。

三木氏は昭和十八年県庁入り。五十九歳。四十年に



三木真一氏 及ぶ県庁生活のうち、十八年を財政畑で過ごした。

「至誠一途」が座右の銘で就任の抱負を求められたときに「自ら実を求めるときに」と答えるほど、脇役を自認する。

「副は本来、地味な役どころ。坂井県政の補佐役に徹していきたい。職員との密接なコンタクトとの中で、行政にかかわりたい」という三木氏の手腕に期待したい。

★神戸JIC次期理事長に

中尾襄氏が内定

神戸青年会議所は七月十日、理事会を開き、次期理事長に中尾襄彦を内定した。九月二十一日の臨時総会で正式に決定する。任期は来年一月一日から一年間。



中尾氏は四十六年入会で活動歴も長く、現在は神戸JICの空港問題特別委員長を務めている。

また同氏は英語にも堪能で海外経験も多く、来年のユニバーシアードに向けての活躍が大いに期待される。

中尾襄氏（なかお・ゆずる）



中尾 襄氏

昭和四十三年関学大商学部卒、三十八歳。

★神戸JICが「海から空へPART II」を出版

神戸空港実現に努力する神戸青年会議所（尤昭福理事長）が、五十六年九月

出版の「海から空へ」に続く「海から空へPART II」を発行した。

同会議所が募集した論文を中心に、論文寄稿者の誌上座談会、シャルル・ド・ゴール空港をはじめとする世界の空港などを色彩豊かなイラストや図で紹介している。



「市民の理解を求めやすい装丁にした」（尤昭福氏）ように随分読みやすい。B6判、百九十頁、三千部発行。千五百円。

★西神工業団地に神戸食品団地、六十年に操業
神戸市西区の西神工業団

地に七月中旬から神戸食品団地が着工された。

神戸風月堂、ベル、中央サービスなど神戸食品団地協同組合の食品メーカー十二社が集団移転する。



事業は三十二億五千万円をかけ、工場十二棟と組合会館を建設する。

これにより同地の敷地面積は総計一萬六千方メートル。売上高も四百九十八億円から五百五十三億円に増える見込み。

六十年には操業予定で、将来は異業種間の交流による新製品開発も活発に行われるようだ。

★KOBEOフィスレディ★



山王 美可さん(20)
〈殖産住宅相互株式會社〉
神戸支店、総務課

今年4月入社したばかりのフレッシュOL。「紳士的な上司の下で、職場の明るい雰囲気がとても好きです」とハキハキした返事が好印象。経理担当で「早く仕事を覚えたい」という一方、趣味のスキーは今年中に2級をめざしたいとのこと。中型バイクの免許をとってドライブも試したい活動派タイプ。塩屋在住。O型

神戸ニューメディア新時代に 積極的なとりくみを!

□出席者

水内 清

〈日本電信電話公社
神戸都市管理部部長〉

滑川 敏彦

〈大阪大学工学部教授
関西ニューメディア研究会会長〉

中山 秀治

〈神戸商工会議所情報文化部長
株神戸コンピュータサービス相談役〉

富井 昭博

〈(財)神戸市開発管理事業団
CATV課長〉

石野 喜一

〈(社)神戸青年会議所地域経済委員会委員長
神栄石野証券株式会社取締役社長〉

内山 和郎

〈日本経済新聞社神戸支社長〉



水内 清さん



中山 秀治さん



石野 喜一さん

——現在、ニューメディアと呼ばれる情報社会の高度化には目をみはるものがあります。今年11月にはキャブテンシステムで商用サービスが実施される予定ですが、今回は神戸と高度情報化社会について、関わりの深い方々にお集まりいただき、現況と積極的なご意見をお願いしたいと思います。

★神戸の優れた条件を生かして情報化社会に先んじよう
滑川 神戸の場合は、残念ながら全国他都市に比べて情報化社会への取りくみが若干遅れているようです。これは、神戸という土地柄のせいも多分にあります。今

こそ「軽薄短小」が新時代のキャチフレーズと呼ばれています。神戸は逆に「重厚長大」型の代表選手だったわけで、ミナトを中心とした造船や鉄鋼などの大型貨物の物流によって成長してきた。つまり、18世紀に生まれた

滑川 敏彦さん



富井 昭博さん



内山 和郎さん

産業革命の産物、汽車や汽船などによる貨物類の物流そのものが情報と人の流れを支えてきていたし、神戸は長い間、これにおんぶしてきたわけです。ところが基幹産業の構造が変わり、物の流れも大いに変わってきた。神戸が今まで誇ってきた有利な条件が表にあらわれてこなかった。十分にポテンシャルがありながらこれを生かされず、いわゆる情報化社会の高度化がどんどん進みつつある中で、それならば、神戸はどないしたらええのか、ということ、ようやく、この4月からニューメディアイアシステム研究会が発足、他都市より遅れたが、前に進むについては他に一歩先んじようという意気込みが生まれてきたところです。

水内 今、電電公社では、INS（高度情報通信システム）実現のための計画を進めておりますが、このINSのねらいといえますか理念は、より安く、より豊富に、より便利に電気通信サービスを利用できるようにしようというもので、全国どこへでも略々均一な料金で通信が

できる、そして、誰でもが自由にこれを利用できるようにしようというものです。

情報化社会では、これは大変重要なことで、データセンターの近くにいとデータを安く利用できる、センターから遠く離れば通信コストがかかって大変に高くなるというのでは、経済・社会活動の高度化は、なかなか進まないし、東京のように情報が集まっているところへの集中化が増々進むようなことにもなりかねない。日本国内どこにいても、沖縄から北海道までどこでも同じように情報が得られる、また、自由に得られるようにしよう、地域の発展を支えるような、電気通信の基盤整備をしようというのがINSの基本であるわけです。

これを支えているのが、ハイテクノロジーといわれている光ファイバーケーブルや衛星による通信方式や超LSI、デジタル通信技術といったもので、光ファイバーを使った通信では、毛髪よりも細い光ファイバーで2万人もの通話を送れる技術がもうでき上っている状態です。

現在、進めている計画では、昭和60年3月迄に北海道から九州迄の光ファイバーケーブルの幹線を作ることにしており、一方、実際にINSを利用するサービス、あるいはそれに伴って生ずる問題を検討するために東京の武蔵野・三鷹にモデルシステムを作って、この秋から実験に入ります。引続いて、来年のつくば科学博では実用的なサービスも提供することを考えております。特に、武蔵野・三鷹のモデルシステムでは、各企業からの利用希望が大変多く、ニューメディアに対する関心の深さがうかがわれます。

神戸においても、光ファイバーの幹線の工事は、昨年5月に着工しておりますし、来年のユニバーシアードへ向けての計画も進めています。また、新しいサービスの中核となるデジタル交換機も今年の3月に1号機が入りまして、60年迄に更に2局に設置する予定です。

ニューメディアの中で、世界的に注目されているものにビデオテックスがあります。日本ではキャプテンシス

テムと呼んでいます。このサービスも今年の11月には神戸でも東京、大阪と並んで始まります。これは、当初、来年の予定であったのですが、神戸商工会議所からも強い御要望を頂いております。練習上げが実現したものです。キャプテンシスシステムは、各家庭におかれてはテレビ受像機と電話に簡単なアダプターを取りつけるだけで情報センターから色々の情報が引き出せるようにしたシステムで、家庭に居ながら買物をするホームショッピングや座席予約、その日のニュース、旅行の案内、行政情報、在宅学習、趣味の講座など多様な情報の利用が可能です。神戸でも大いに使われると思います。

滑川 キャプテンという言葉はとても面白いネーミングだと思えますね。もともとは「文字図形情報ネットワークシステム」なんです。これを英語におきかえて頭文字を並べなおすと、Cはキャラクター（文字）アンド、Pはパターン（図形）、Tはテレフォン、アクセス、インフォメーション、I、Nはネットワーク、つまり、CPTAINなんです。まあ、INSのはしりと云えます。

さきほどの話ですが、仮りに月刊神戸っ子がキャプテンサービスに加入されて情報提供したとして、各家庭につないだチャンネルに神戸っ子の最新情報が流れてくると、神戸っ子という雑誌が失業しないかという疑問も出てくるわけです。今までの印刷が、ニューメディアの出現によって競合するの、互いに補完しあうのかというメディアミックスの状況があらわれてきたのも事実ですね。月刊神戸っ子を実際に手にしなくても、電話とテレビを使って読めるようになってくるわけです（笑）。

内山 通信回線の自由化、ニューメディアの登場という技術革新と制度改正の両面から、情報産業の基盤を根底から揺がせる潮流が押し寄せてきているといえますね。情報化社会で最も大切な点は、今までのような資本力ではなく、何といっても情報力です。新聞社など情報収集の原点であるマスコミ各社は、情報の収集、蓄積、加工、提供という流れの各工程で情報革命への対応を急いでい

ます。ヨーロッパでは、新聞の単体経営がほとんど経営不振に陥り、アメリカでは新聞企業がCATV、ビデオテックス、テレキストなどへの積極進出を図り、複合経営によって業績を向上させようと努力しています。日本はアメリカ型の経営をめざしていますし、一方では、放送衛星、通信衛星が打ちあげられるのにもなつて、これをめぐるマスコミの争奪戦はより激しさを加え、衛星にフロンティアを求める時代が近づいてきたことを感じますね。

中山 神戸商工会議所としても神戸が他都市に比べてINSなどの高度情報化社会への取りこみが遅れているという認識はありました。京都商工会議所で3月にはその取りこみへの提言が行なわれたし、神戸も新年度になって、6月に高度情報化問題懇談会が発足し、10、11月の中小企業振興月間の行事とあわせて、何とか遅れをとり戻そうということになりました。しかし、方向づけの段階で、できるだけわかりやすく、それもくり返しの広報活動が不可欠だということで、会議所の機関誌でも毎月連載し、INS関係の会合や講演会でもできるだけもうけようと考えています。

ニューメディアについては具体的に使えるものを見ていくことが大切なので、10月頃にアンケート調査をやり、さらに一般の方々のアイデアを集める懸賞論文の募集も考えています。ただ正直いって経営者の心中には若干のとまどいがあるのも事実のようです。7月の軽井沢での生産性本部のトップセミナーでも、新聞報道ですが、大方のご意見は「乗り遅れると不安」しかし「乗過ぎては危険」と表現されています。家庭の主婦が「便利になるのはよいけれど、料金を払うのはご免」という考え方と同じです。新しいものへのとまどいはいつの時代にもつきものなのでしょう。

では、神戸の実態面はどうかとみますと、大企業では、それなりに努力されています。神戸製鋼がまず全国初のテレビ会議を実施されましたし川重が電々公社のデジ

タル回線を使って本社と工場をつなぐことを計画中。三菱電機では、光ファイバーでLANローカル・エリア・ネットワークを企業内情報化に取入れておられます。

また、神戸ポートピアホテルでも宿泊外国人向けのCATV（有線テレビ）や、ダイエーはショッピングについての色んなプランを持っておられます。ただ、商工会議所は、もともと中堅・中小企業が大半の団体ですから、ニューメディアの活用についても、中小企業活性化のためにはどのように活かしていくか、どう具体化するかが中心的な課題になります。

★ニューメディアによって神戸の活性化を！

石野 神戸青年会議所では、昨年来、地域経済委員会であることを話しあってきたはいるのですが、なかなか大変な問題でして、そう思うようにはならない、神戸の地域活性化にどういう形で考えていったらいいのかということ、情報の問題についての研究は続けてきているものの、とても難しい部分が多いんです。たとえば、中山さんが言われたように、コンピュータについては経費とかの具体的な数字として、人件費がいくら安くなるとかはできるけれど、情報の問題については皆目見当がつかないというのが正直なところですね。キャブテンシステムについても、コスト面から考えて、文字多重放送の方が有効な部分もあるのではないかと、キャブテンによって、実質上、販売面がどの程度伸びたのかをチェックできるのかを考えたら、現時点ではとても最終的な絵が描けないというのが、私たちの考えですね。

内山 石野さんのお話のように、ニューメディアはいろんな問題を抱えていますね。CATVだけを見ても、私鉄、商社、流通、マスコミなどが殺到して全国各地で多チャンネル、自主放送をベースとした都市型CATV局設立の動きが相ついでいます。これには300ほどの動きがあるといわれ、多少過熱気味な一方、アメリカでのテレビ受像機の保有世帯数に対するCATVの普及率は35%

に達しているものの、今はCATV局の再編成期で、利益を出しているのはごくわずかなんです。実際には5年間には赤字ばかりだから、企業努力が不可欠なんです。それから、キャブテンについて、世界最大の小売業シアーズ・ローバック（シカゴ）の実験では、ビデオテックスは今の技術レベルでは商品の検索に時間がかかる上、画質が悪いので、商品のPRには不向きだけれど、注文を取ったり、料金を支払ったりするなど、ホームショッピング実現のカギを握るものと考えているようです。私はキャブテンは一利用法としてホームショッピングに結びつくかどうか、注目しています。他には中古車のオークションや東京銀座で商店連合会が双方CATVでショッピング、フアッション、店舗案内、街路案内をはじめ、各種生活情報や海外情報を買客に提供しようとしていますね。学界の推計では「CATVとビデオテックスをあわせたニューメディア全体でみると、1990年代前半には、小売総額の15/20%にあたる金額の取引がニューメディアによるホームショッピングで実現するだろう」といわれています。神戸でもぜひ、三宮、元町などの商店街でも本格的な検討を始めてほしいものです。

富井 情報化社会において、神戸の情報基盤が大変大きな問題になってきていると思います。民間でもさまざまな自主研究がなされておりますが神戸市でも新時代へ向けて滑川先生や水内部長のお力を借りて研究を進め、その対応をいろいろと考えてはいますもの、走り出してみたら誰もついてこなかった（笑）ということがないよう着実に進めていこうとしています。

神戸はフアッション都市、コンベンション都市としてはかなり評価されてきましたが、情報化社会への対応はまだこれからです。私どもでは特にケーブルテレビ（CATV）を推進しているのですが、須磨ニュータウンでは、難視対策として、ポートアイランドでは景観形成も

含めてアンテナ類の排除のための地下ケーブルを用いて実施しています。神戸市の開発するニュータウンでは、テレビも映らないといわれてはなりませんので、インストラクチュアとしてもCATVを設置しています。NHKの受信料の他にCATV用の料金が別に必要という点もはじめはなかなか受け入れられませんでした。現在は住民の理解も得て、より美しい画面を提供することができるようになりました。また、来年のユニバーシアード神戸大会が行われる研究学園都市の選手村にもユニバーシアード開催までにケーブルテレビをと考えています。これには企業のサブライが必要ですし、オフイシャルサービスとして、空きチャンネルを利用した外国人選手向けの放送も考えています。

内山 神戸には富士通テン、東亜特殊電機、DXアンテナなど、世界に通じる先端企業が目白押しですから、これら企業にも知恵を借りればきっと素晴らしいですよ。

富井 ユニバーシアード大会向けにキャブテンシステムを利用した公衆ビデオテックスの様なものを考えています。各企業に参加を働きかける準備も進めているんです。そのためには、I・Pの募集も必要だし、月刊神戸っ子も情報提供社とりまとめ役になっていただきたいですね（笑）。テレトピア構想については六甲アイランドを対象として9月末に計画案を提出すべく作成中です。水内 ユニバーシアード大会は、INSやニューメディアを一般の人達だけでなく、世界各国の人達にもよく知ってもらいたい機会だと思います。市の方でもグリーンEXPO'85の同時開催を計画されていますし、私どももできるだけ協力したいと考えております。

それと、テレトピア構想ですが、神戸は、貿易港として日本だけでなくアジアの中心的な港でもありますから、この港の機能を中心としてシステムを作る、例えば、国際的な海事情報、海貨情報などを取り入れた海事VAN（付加価値通信網）などが波及効果の上でも必要なシステムと思います。

富井 開港15年の神戸ですから、港湾についてのノウハウにはすごいものが期待できます。

内山 神戸市では、西神、須磨両ニュータウンでのCATVを使った情報サービスがすでに実施されていますが、その他、国鉄湊川貨物駅跡地の未来型都市づくりでも、ニューメディア時代に対応できるようINS情報センターCATV利用の教育センターなどの設置をもち込もうとしているようです。六甲アイランドをハイテク・シティにしたいとの報告書も出ていますし、今後は、部分的に考えるのではなくて、トータルにとらえていくべきですね。

水内 地域INSという言葉がありますが、その地域の地理的条件、産業、経済、社会生活を考えて、それぞれの地域の特徴を持ったINSを整備していくのが大切で、また効果的です。大分県の一村一品運動をベースにした地域INSが有名ですが、神戸でも、西神、ポートアイランド、六甲アイランド、メリケン波止場の再開発などネライを明確にして神戸の特色を出して行く必要があると思います。サンチカタウンにキャブテンシステムなどを使って情報コーナを作り、インフォメーションタウンとして更に活性化を図る方法もあるのではないかと。石野 情報についても、その主体をどこにおくかという点が大切です。観光都市としての神戸を目玉にしてもいいですね。

中山 そのきっかけにはユニバーシアード大会に使用した端末機を利用するという案はどうでしょう。

石野 月刊神戸っ子のドリंकマップを入れるのが、いちばん観光案内にもってこいですね(笑)。

中山 情報化社会についての神戸サイドの取りくみ——という話ですけど、私は、どんな小さなことでもいいから、具体的に目標をきめてかかりたい、この姿勢がいちばん大切と思っています。神戸の地場産業で生かされることなら、海事VANにしろ、ケミカルシューズにしろ、いろんな事例の中で、神戸でなら、これは有利な展

開が期待されると思うものを、少しでも着実に実現していきたいものですね。

水内 私もその姿勢が大切だと思いますね。

内山 兵庫県は郵政省のテレトピア構想には西脇市、通産省のニューメディアコミュニティ構想には姫路市をそれぞれ候補として指定を獲得する意向のようです。神戸市はこれより一步先んじているわけですから、今後は県と市がともに一体感をもって進めていってほしい。

石野 ニューメディアというけれど、パソコンと同じで使い方がわからない者にとっては無用の長物、それなのにニューメディアの普及の波は加速度的に大きくなるようになって進むでしょう。まず、ニューメディア・アレルギーという人々を減らしていくことも大切ですね。

滑川 高度、高度、というから、ビジネスマンも一般家庭の人もめんどくさい、という気分になるんですよ。だから、よけいにニューメディア・アレルギー人口も減らない。従って、普及できない。

ニューメディアといっても、今はないものです。ないものについていくら語っても一般の人たちは受け入れられないわけありません。

やはり必要性があって生まれてきたニューメディアなのだから、INSについて難しそうに考えることよりも、まずは身近なファックスが初歩なんですよ。

次に、キャブテンシステムがまずどんなものか、を理解してもらうためのPRが大切だし、一方、受け入れ側としての市民も耳を傾け、面白がって興味をもつという雰囲気づくりからとりかかりたいですね。

(ブラン・ドゥ・ブランにて)

田崎真珠株式会社

取締役社長 田崎 俊作
神戸市中央区港島中町 6-3-2
TEL (078) 302-3321

株式会社ベニヤ

取締役社長 松谷 富士男
神戸市中央区三宮町 1丁目10-1
TEL (078) 332-3155

モロゾフ株式会社

代表取締役会長 葛野 友太郎
神戸市東灘区御影本町 6丁目11番19号
TEL (078) 851-1594

